

（翻訳）「北京大学出土文献研究所工作簡報」総第一期

竹田健二

本稿は、二〇〇九年に北京大学が収蔵した漢簡に関する内部文書「北京大学出土文献研究所工作簡報」（以下、「簡報」と略称する）総第一期（二〇〇九年十月）を、北京大学出土文献研究所所長・朱鳳瀚教授の了解を得て翻訳したものである。

「簡報」総第一期には、「北京大学蔵西漢竹書入蔵以来工作紀要（北京大学蔵西漢竹書の収蔵後の作業に関する要録）」・「北京大学蔵西漢竹書情況簡介（北京大学蔵西漢竹書の状況の説明）」・「北京大学蔵西漢竹書保存状況及保護措施（北京大学蔵西漢竹書の保存状況と保護措置について）」の三つの文章が収められている。本稿執筆時点では、この北京大学の漢簡に関する公式発表は、『国際漢学研究通訊』第一期（『国際漢学研究通訊』編輯委員会、中華書局、二〇一〇年四月）所収の「北京大学新獲漢竹書“概述」（以下、「概述」と略称する）のみである。

「概述」は、「簡報」総第一期中の「北京大学蔵西漢竹書情況簡介」に概ね相当するが、改稿され一部内容に異なるところもある。また『国際漢学研究通訊』第一期には、表表紙・裏表紙のそれぞれ裏面に、合計六枚の竹簡のカラー写真が付されている（表表紙裏に『老子』二枚・『趙正書』の篇題簡一枚、裏表紙裏に『蒼頡篇』一枚・『周訓』一枚・『周訓』の篇題簡一枚）。但し、いずれも釈文は付されていない。

なお、訳文中の（ ）の部分は、原文に（ ）付きで記されているものである。補注は、「簡報」と「概述」とで内容の異なる点を中心に、訳者が付した。

北京大学蔵西漢竹書の収蔵後の作業に関する要録

北京大学は二〇〇九年の初め、一旦海外に流出した前

漢時代の竹簡を、寄贈によって入手した。この竹簡は一月十一日に北京大学賽克勒博物館に搬入された^{補注1}。博物館は直ちに専用の文物収蔵室を準備して竹簡を収蔵し、厳密な保安措置を施した。北京大学党委員会書記の関維方・副書記の吳志攀・副校長の張国有・林建華ら大学の指導部、及び社会科学部の程郁綴部長らは、直ちに収蔵室を訪れて観察・指導を行った。大学の指導部は、考古文博学院と中国古代史研究中心とが協力して竹簡の保護と整理にあたることを決定した。具体的には、歴史系の朱鳳翰教授が竹簡の整理を、考古文博学院文物保護教研室の胡東波副教授が竹簡の保護をそれぞれ担当することとなった。そしてその後、簡牘保護の専門家に対して、竹簡に通りの洗浄・点検を行い、あわせて竹簡の保存状態に即した保護計画を策定することを要請した。同時に、我々は入手時点の竹簡の写真を撮影し、最初の段階の資料として保存した。

冬休みの後、天候が暖かくなる前の短い間を逃さず、できるだけ早く竹簡の洗浄・整理を終えて、高品質の画像資料と竹簡の各種項目の第一次データとを得るために、竹簡保護・整理グループは、三月中旬に竹簡の洗浄・整理作業と写真撮影作業とを開始することを決定した。各作業の準備を進めるにあたり、人員・経費・設備・施設

など様々な困難な問題は、すべて克服された。大学と社会科学部の指導部も、全力を挙げて我々の作業に対する支援を行った。

三月十三日から三十日までの間に、朱鳳翰教授の統括のもとで、竹簡の洗浄・整理作業と写真撮影作業が行われ、完了した。胡東波副教授はこの間、竹簡の科学的保護とサンプリングを担当した。歴史系博士課程修士の韓巍と博士課程学生の陳侃理とは、組織間の連絡・調整と事務処理を担当した。考古文博学院と歴史系との一部の研究生は、補助的な作業や竹簡のデータ整理などに従事した。

この竹簡が北京大学に搬入された時、出土した時点での状態は既に破壊されており、竹簡の本来の配列は完全に乱されてしまっていた。幸いなことに竹簡の保存状態は比較的良好であり、洗浄・整理作業が大きな困難に遭遇することはなかった。しかも、脱色処理を行うことなくそのまま直接写真撮影を行うことができた。写真を撮影した後の竹簡は、ガラス片に糸で縛り付けられて固定され、撮影の順序に従って整理番号を付されて、番号札をつけられた。文字が書かれている竹簡と文字の書かれていない竹簡（文字の書かれていない断簡を含む）とのすべてに整理番号を付した結果、合計三三四六枚の竹簡

があつた。我々が招聘した長沙簡牘博物館の宋少華研究員は、経験豊富な簡牘保護の専門家である同館の汪力工・金平・胡冬成の三氏を帯同して来学し、竹簡の洗浄・整理を担当した。彼らの極めて優れた技術により、貴重な文物である竹簡は完全に安全になり、記されている文字はどれも鮮明になつた。竹簡の洗浄・整理と同時に、残留していた泥土・編繩・絹織物や漆器の残片などが科学的に採集・保存され、サンプルの採取と計測が行われた。

竹簡の写真撮影作業は、上海古籍出版社の委託により、上海龍桜彩色制版有限公司が請け負い、同社の副社長・蔡志榮が責任者となつた。上海古籍出版社の吳旭民主任も撮影現場に向いて作業に協力した。我々は超高画素カメラによる撮影を行い、高解像度の写真を得ることとした。撮影後、見本としてプリントアウトした写真は極めて鮮明で、その色彩は実物同様であり、後の整理・出版と研究に大変好都合であつた。竹簡は写真の撮影が終わると、ガラス片に糸で縛り付けられて固定された。その後、研究生により簡長・簡幅・契口・編縫位置などのデータが採取・記録され、また後の照合のために、簡単な積文が記録された。その後、竹簡はそれぞれ専用の容器に収められ、蒸留水に浸されて保存された。

こうした作業の過程で、我々はこの漢簡の内容が極め

て豊富であることを認識した。作業に従事したスタッフは、ほとんど毎日のように新しい発見をし、絶えず興奮と喜びに浸つていた。この漢簡の内容はさまざま古代の書物であり、これまで見てきたような律令や行政文書や遺策ではなく、従つて「西漢竹書」と称すべきものであつて、その学術的価値は並のレベルではない。このことを、我々は次第にはつきりと認識したのである。

この段階で、国家文物局の單霽翔局長・博物館司の宋新潮司長・羅静副司長・教育部社会科学司張東剛副司長など各部門の指導者が作業現場を視察した。清華大学の李学勤教授・故宮博物院の王素研究员・浙江省考古研究所の曹錦炎研究员・中国文化遺產研究員の胡平生研究员・同じく劉紹剛研究员・湖南大学の陳松長教授・首都師範大学の劉樂賢教授・中国社会科学院歴史所の馬怡研究员・文物出版社の編集者である蔡敏氏などの専門家も相前後して現場を參觀し、指導した。

漢簡の画像撮影とデータの記録が終わつた後、直ちに漢簡に記された文字の積読と整理の作業が展開された。四月中旬から五月末までの間、朱鳳瀚教授が統括して、韓巍・陳侃理兩名が参加し、竹簡の内容に関する初步的な分類と分篇作業とが行われて完了した。分類作業は、先ず始めに竹簡の長さ・形制・文字の書体に基づいて行

われ、その後文字の内容などを参考にして進められた。同時に、残欠した竹簡についても綴合・編連が進められた。この作業が終了した後、我々はこの漢簡の内容と性質とに関する、初歩段階としての全体的な把握を行った。その結果、この漢簡は六分野にわたる二十種近くの古文献を含むものであることを確認し、この認識を基礎として以後の釈読や整理を行った。

六月八日、大学は正式に「北京大学出土文献研究所」の成立を承認し、朱鳳瀚教授を所長に、考古文博学院の趙化成教授を副所長にそれぞれ任命した。「出土文献研究所」は、中国古代史研究中心と考古文博学院とが共同で設立した特別チームであり、我が大学の歴史・考古・中文等の系に所属する出土文献の専門家と、出土文献の保護に関する専門家とにより組織された。以後、この漢簡に関するさまざまな作業は、すべて「出土文献研究所」の管理のもとに展開されることとなり、組織・経費・人員などの面は確実に保証されるようになった。同時に、我が大学の出土文献に関する研究力とその組織編成面についても、整合性が高まり増強された。

六月から始まった漢簡の分類・釈読作業は、計画通りに進化した。我々は先ずこの漢簡の中で重要な『老子』や『蒼頡篇』などの文献を、第一段階の研究重点として

選定した。朱鳳瀚教授が『蒼頡篇』を、趙化成教授が『趙正（政）書』を、中古史中心の間歩克教授が『周馴（訓）』を、韓巍講師が『老子』を、中文系の李零教授（陳侃理博士が協力）が『日書』などの数術関係の文献をそれぞれ担当した。十月の初めの時点で、『老子』・『蒼頡篇』・『周馴（訓）』・『趙正（政）書』の初歩段階の釈文が完成し、『日書』等の数術関係文献の整理もかなりの程度進展している。

北京大学蔵西漢竹書の状況の説明

北京大学賽克勒博物館に搬入された時点で、西漢竹書は竹簡の長さに応じて九個の大きささまざまなプラスチック容器に入れられ、防腐剤の入った液体に浸されていた。容器の中には、赤色や黒色の漆器の残片や竹製の算籌も少量、竹簡とともに入っていた。竹簡が出土した時点の状態は既に失われており、竹簡の配列は完全に乱されていた。このため、竹簡には、写真を撮影する順番に従って整理番号を付けることしかできなかった。洗浄・整理の結果、合計三三四六点到整理番号を付した（完整簡・残簡を含む）。その中の完整簡は一六〇〇枚余りである。今後接合・復原により完整簡は二三〇〇枚以上になると

推測される。この竹簡数は、現在までに発見されている前漢時期の書籍類の竹簡文献の中で、最多である。

竹簡の多くは保存状態が良好で、表面は黄褐色をしており、一部のものには暗褐色を示していた。竹の性質はしっかりと固く、筆跡ははっきりとしており、墨の色は重々しく黒光りしていた。『日書』等の竹簡には、赤色の区切り線・絵・文字が記されており、その色は鮮明で美しく、描かれたばかりの新しいものようであった。多数の竹簡には契口と明らかな編繩の痕跡とが存在し、ごく一部の竹簡には小さく切断された編繩と絹織物とが付着していた。文字のほとんどすべては、竹簡の内側の黄色の面に記されており、わずかにいくつかの篇題だけは竹簡の青い面の上端に記されている（竹の外側の青い皮を剥ぎ取ったところに書写されている）。文字の書きぶりは整っており、字配りも均整がとれて、書法は精美である。竹簡の保存状態は、これまでに出土した戦国秦漢期の簡牘の中で一番良い。

竹簡は簡長により、長・中・短の三種類に分類することができ、簡端はいずれも平斉である。長簡は簡長四十六cm、漢代の二尺に相当し、編綫は三道、『日書』などの数術類の文献が記されている。中簡は簡長三十一・三十二cm、漢代の一尺三寸〜四寸に相当し、編綫は三道、各種

古代の書物が記されている。短簡は簡長二十三cm、漢代の一尺に相当し、編綫は兩道、医薬関係の古文獻が記されている。短簡は、先ず文字が記され、その後編繩が行われており、契口が無く、残留している編繩が一部の文字の上に覆い被さっている。こうした現象は、これまで文書類の竹簡にしか見られなかったものであり、書籍類の竹簡に認められたのは極めて稀である。

竹簡の書写年代については、今のところ以下のような判断材料がある。先ず、数術類の古文獻に含まれる一枚の竹簡に、「孝景元年」の年号が記されていた。このことから、書写年代は漢の武帝より遡ることができないことが分かる。北大漢簡の中に、前漢時代の他の年号が記されている竹簡はない。また、竹簡に記されている文字の書体について見るならば、文獻ごとに古いものと新しいものとの違いがいくらかあるが、全体としての風格は成熟した漢隷に既に近づいており、馬王堆漢墓帛書や銀雀山漢墓竹簡に見られるところの秦隷に近い前漢前期の隸書とは、或る程度の違いが認められた。但し、北京大学蔵西漢竹書中の最も成熟した隸書も、定県八角廊漢墓から出土した宣帝期の竹簡と比較すると、いくらか古風で素朴である。竹簡の内容についての初步的な分析と結び付けて考えるならば、この竹簡の書写年代はおおよそ前

漢の武帝期であり、多くのものはおそらく武帝期の後半に書写されたと推測される。

これまでの整理の結果、この漢簡の性質と内容とについて、基本的なことは既に確認することができた。すべての竹簡は古代の書籍に属するものであり、名簿・律令・公文書などの役所の文書類は含まれておらず、また遺策・手紙などの個人の文書も含まれていない。その内容は極めて豊富である。『漢書芸文志』（以下『漢志』と略称）において書籍は「六芸」・「諸子」・「詩賦」・「兵書」・「数術」・「方技」の六つに分類されているが、その六分野の書籍をすべて含んでいる。現段階における分類によれば、具体的には以下の通りである。

(一) 六芸類

『漢志』の「六芸略」に著録されている主な文献は、儒家の經典である「六經」とその注釈とである。他に「小学」（文字・訓詁に関するもの）の類が末尾に附属し、別に外史書の類が『春秋』類の下に附属している。

北大漢簡中、この「六芸」類に分類することができるものは、第一に文字学の著作である『蒼頡篇』である。

『蒼頡篇』は秦の丞相・李斯が編纂した小学関係の識字

のための書物であり、篆篆で書かれていた。前漢の時、「閭里の書師」が『蒼頡篇』を別の秦代の小学の書物である『爰歴』・『博学』と合わせて、やはりこれを『蒼頡篇』と呼んだ。この書物はおおよそ南宋以後に亡佚した。近代以降、中国の西北地方と安徽省阜陽県双古堆漢墓から相次いで漢簡『蒼頡篇』が出土したが、これらはいずれも細切れの残簡であり、書物全体の篇章を復原することはできなかつた。双古堆簡に残っていた字数が最も多いが、それでも僅か五四二字である。北大簡本『蒼頡篇』は七十枚余りの竹簡があり、約一二三〇字分が保存されていた。しかもそのほとんどすべての文字の筆跡が鮮明であり、これまで知られているテキストの中で最も文字数が多い。篇章の構成については、漢代の「閭里の書師」が六十字ごとに区分して一章とした改編本とは異なっており、秦代の原本の様相に近い。特に分章の方法・章ごとの標題の書き方・各章の文字数は、いずれも千年以上もの間分らなかつたところである。北大簡本『蒼頡篇』とこれまで発見されている簡牘本や輯佚本との関連が解明されることにより、秦漢時代の小学の經典の姿が全面的に明らかになり、先秦・秦漢時代の文字学についての研究が進むと考えられる。

第二には、歴史書『趙正（政）書』である。同書は竹

簡数が五十枚余り、文字数は一五〇〇字近くである。秦の始皇帝の死と秦朝の滅亡とをめぐり、秦の始皇帝（竹簡の本文では「秦王趙正（政）」と称されている）・李斯・胡亥・子嬰らの発言が記述されており、その成書年代は前漢前期と考えられる^{〔補注3〕}。同書の一部は、『史記』の蒙恬列伝・李斯列伝に見えるが、まったく同じというわけではない。『趙正（政）書』は司馬遷が『史記』を著す際に参考にした資料の一つである可能性があり、史料の価値はかなり高い。

（二）諸子類

北大漢簡中の諸子類の書籍の中で第一に挙げられるのは『老子』である。これは馬王堆帛書本・郭店楚簡本の出土に続く、第三の『老子』の古本の出土であり、今までのところ最も保存が良く整っている漢代の古本である。北大簡本と比較するならば、郭店本と馬王堆本の方が年代はやや古いが、両本にはいずれも不十分な点がある。郭店本は内容が今本の五分の二しかない^{〔補注3〕}。馬王堆本は全体の揃っているテキストではあるが、残欠した部分が多い。もちろん馬王堆本の甲本・乙本は、それぞれお互いに欠けた部分を補うことができるが、それでも補えない部分がある。これに対して北大簡本の『老子』は、

復原後の完整簡は合計すると二一八枚で、五三〇〇字（重文を含む）近くが記されている^{〔補注4〕}。文意の理解に影響を与える欠落箇所は、文献全体のわずか一％に過ぎず、ほとんど「完璧」なテキストであると言つてよい。その中には「老子上経」と「老子下経」という篇題も記されており、「上経」は今本の『徳経』に、「下経」は今本の『道経』にそれぞれ相当する。こうした命名方法は、『老子』の古本の中で初めて見られたものである。その他、北大簡本『老子』は、各章の前にすべて分章の符合が付されており、その分章の仕方には伝世本と異なるところがあり、古本『老子』の分章問題を検討する上で最も良い資料となる。字句については、伝世本・郭店本・馬王堆本と異なるところも多い。

こうしたことから、北大簡本『老子』は、『老子』という文献の整理・校勘を行う上で極めて高い価値を有しており、これまで学者の論争が絶えなかった多くの難問が、このテキストの出現により解決する可能性がある。このテキストは、戦国中期の郭店楚簡本及び秦から前漢前期の馬王堆帛書本と、各種の『老子』の伝世本との間に架かる橋のような存在であり、『老子』という書物の形成・発展・定着の過程について理解を深める助けとなる。

諸子類の書籍の第二は、『周訓（訓）』という篇題のあ

る古佚書である。竹簡数は二〇〇枚余り、文字数は四八〇〇字に近い。書物全体は、「周の昭文公」が歴史的事件を用いて「躰(恭)太子」を教え諭す形式となっている。そして堯舜の古から戦国時代中期に至るまでの重要な歴史的事件がいくつか記されており、国家を治める君主たる者の道について述べられている(補注)。その成書年代は戦国後期である可能性がある。この文献はおそらく、『漢志』諸子類中の「道家」に記され、そしてその後早くに亡佚した『周訓』十四篇(補注)であろう。

諸子類の書籍の第三は、『妄稽』という篇題の付されていた古佚書である。竹簡数は一一〇枚余り、文字数は三〇〇〇字に近い。或る士人の家庭において、夫・妻・妾の関係をめぐって起きた出来事を記したもので、話の筋が変化に富み、表現が生き生きとしている。現存するものとして最古で最長の古代の小説であり、『漢志』「諸子」十家の中の「小説家」に属する文献である。これまで出土した簡帛文献の中には、天水放馬灘秦簡に短編の志怪故事が一つあった。北大簡本『妄稽』は、長編で文学性とストーリー性の強い、世俗的な出来事に題材を取った小説が、前漢時代に既に存在していたことを示すものである。これにより、中国古代文学史の一部が書き換えられることになる(補注)。

この他にもまだ数十枚の竹簡があり、それらは内容と体裁から見て、やはり諸子類に属する古文獻と見られる。その一部は『韓詩外伝』・『晏子春秋』・『說苑』などと内容が重なるところもあるが、完全に一致するわけではなく、これまで知られていなかった内容をも含んでいる。残念ながらこれらの竹簡には残欠が多く、全体を復原するすべがない。

(三) 詩賦類

北大漢簡からは、別にもう一つ、竹簡数五十枚余り、文字数一二〇〇字余りの文学作品も発見された。その文献は、全体が「魂」と「魄子」との対話という形式を取り、ユニークな構想、壮大なスケール、豊かな修辭を備え、排比を列ねた作品である。文体は漢代の賦に属すると考えられ、『魂魄賦』と仮称するのが適当と思われる。作品の体裁と一部の語句については、文帝・景帝期の文豪・枚乗の代表作である『七発』と似ているところがあるが、両者には異なる点も少なくない。同時代の別人の作品であるか、或いは後世の人が模倣した作品であるかも知れない。これまでに出土した戦国秦漢期の簡帛資料の中で、詩賦類の作品は、銀雀山漢簡の『唐勒』・尹湾漢簡の『神鳥賦』・敦煌漢簡の『風雨詩』など、わずかし

か発見されていない。『唐勒』は「賦」のスタイルに属し、戦国後期の宋玉の作品であると考えられているが、残欠が激しく、その全貌を復原することは困難である。北大簡本『魂魄賦』は、これまでに出土した簡帛文献中の漢代の賦としては、年代が最も古く、分量が最も多く、また全体が最も良く保存され、文学水準が最も優れたものである。漢代の賦の形成と発展の歴史を研究する上で極めて価値が高い。

(四) 兵書類

十枚余りの竹簡について、その内容が銀雀山漢簡の『地典』と似ており、『漢志』「兵書略」の中の「兵陰陽」家に属するものと見られる。これは、古代兵学と数術の学とが結合したものである。

(五) 数術類

北大漢簡中、数術類の文献は極めて豊富である。簡長が四十六cm前後に達する長簡に記された文献の中には、時日の選択に関する三種類の異なる文献が含まれており、それぞれ『日書』・『日忌』・『日約』と篇題が付されている。現存する竹簡数は合計一三〇〇枚近く、断簡を綴合して完整簡となるものが七〇〇枚近くと推測される。こ

のうち『日忌』と『日約』とは、こうした篇題と内容とを持つ文献の発見として初めてのものである。『日書』は内容が豊富で、これまでに出土した秦漢期の『日書』に記されていたことが、ほとんどすべて含まれている。但し、これまでのものに見られなかった図や文章も少なくない。中簡にも、多くの数術類の文献が記されており、そのうち、篇題が記されているものは以下の通りである。先ず『樞(堪)輿』は、内容的に『日書』類に近いものである。後世の「風水を見る」ことを行う堪輿家とは異なる。『六博』は、博局を用いて占卜を行う内容の文献である。尹湾漢牘の『博局占』と類似しているが、こちらの方が詳しい。『雨書』は、風雨や気象に関する占いの文献である。『荆決』は、筮占に類似した、算籌を用いて占いを行う内容の古文獻である。『節』は、四時の時候について述べた、『月令』に類似した古文獻である。その他に、『刑徳』の一部と内容の類似するものがある。中簡に記されているこれら複数の数術類の文献の篇題と内容とは、そのほとんどが従来知られていないものである。

北大漢簡中の『日書』関係の文献は、これまでに出土している『日書』類の竹簡の中でも数量が最大であり、その内容は極めて豊富である。今後『日書』等の特定の選択類の数術類の文献についての理解は、大いに深まる

ものと考えられる。北大漢簡中の他の教術類の古書も、ほとんどが新たに発見されたものであり、古代の教術に關する學問、及びそれと關連する思想史・科學技術史・社會史の研究を深める上で、極めて重要なものである。

(六) 方技類

北大漢簡中、簡長が二十三cm前後（即ち漢代の一尺）の短簡はすべて、各種の疾病を治療するための古代の処方が記されたもので、『漢志』「方技略」の「經方」に属するものである。竹簡数は七〇〇枚余り、そのうち完整簡は五三〇枚余りである。一つの処方ごとにそれぞれが獨立した章をなし、章の始めには分章の記号「・」と通し番号とが記されている。現存する最大の通し番号は「百八十七」である。本文の前には、番号と処方の名前だけを記した「目錄」一卷がある。この文獻の内容は、内科・外科・婦人科・小兒科等の様々な種類の疾病についての治療方法であり、それぞれの病名・症状・用いる薬の種類・その数量・その製造方法・服薬の方法と禁忌が含まれている。この処方、馬王堆漢墓帛書中の『五十二病方』と密接な關係があり、両書の或る箇所は内容が極めてよく似ている。両書の異なるところは、『五十二病方』の「五十二」が、病氣の処方进行分类した区分の数であり、

各区分の中に多くの処方が含まれているのに対して、北大漢簡の医簡の番号の数字はすべて単独の処方である点である。北大漢簡の医簡における単独の処方の総数は、『五十二病方』の数に及ばない（『五十二病方』の処方の総数は二八三ある）。しかし、北大漢簡の処方の多くは『五十二病方』に見られないものか、或いはまた『五十二病方』の欠けた部分を補うことができるものである。最も重要な点は、北大漢簡の処方の中には、章末の竹簡の正下面部に、「秦氏方」・「冷游方」・「翁壹方」等の篇題があるものが存在する点である。これらはすべて古代の名医の名であり、その中の「秦氏」は、戦国時代の名医・扁鵲（秦越人）である可能性がある。こうした篇題は、北大漢簡の医簡が、当時広まっていた名医の処方の中から抜粋して編纂された可能性があることを示している。

北大漢簡中の古医書は、馬王堆漢墓帛書の古医書の出土後に出現した医学關係文獻として、最も豊富な内容を持つものであり、中国伝統医学が長い伝統と、広く深い内容を持つことを改めて証明した。北大漢簡中の古医書と馬王堆漢墓帛書中の医書とについての総合的な研究により、中国における古代の医学文獻と医学史の研究は、新たな段階へと進むことになるであろう。

以上述べてきたことその他に、北大漢簡の学術的価値は以下の点に認められる。

一、北大漢簡中には儒家の經典が発見されておらず、道家と数術・方技類の文献がかなりの比重を占めている。この点は馬王堆漢墓帛書の状況と近く、前漢中期以前の南方地区における文化的な雰囲気と学術的気風とを理解する上で、意義深い。

二、これまでに発見された漢代の簡牘資料は、その年代が主に前漢の前期と後期とに集中しており、前漢中期、つまり武帝期から宣帝期のもが発見された事例は比較的少ない。しかしこの時期は、まさに隸書が成熟し定型化する段階に当たる。北大漢簡はこの年代上の欠落を補うものであり、隸書発展の歴史を研究する上で、重要な価値がある。

三、北大漢簡の書法の見事さは、出土簡牘の中で極めてまれなものである。初歩的な観察によれば、多くの異なる書風があり（つまり多数の書写者が書いており）、古朴なもの・飄逸なもの・力強いもの・重厚なものと様々で、それぞれに特色があり、すべて漢代の隸書の逸品と称するに値し、非常に高い書法芸術的価値がある。

四、北大漢簡は数量が膨大で、保存状態が極めて良いため、古代の簡牘・書冊について、材料・修理の仕方・

編連・サイズ・篇題・句読点などの記号の問題を研究する上で、豊富な実物の資料を提供するものである。

以上述べてきたのは、これまでの作業に基づく初歩段階の理解でしかない。整理・研究が進むに従って、続々と新しい発見があるに違いない。確かなことは、北京大学西漢竹書は、二十世紀に発見された馬王堆漢墓帛書・銀雀山漢簡・郭店楚簡・上博楚簡、及び二〇〇八年に清華大学が収蔵した戦国竹簡に続いて世に出た、出土文献の一大宝庫であるということである。北大漢簡は、先秦史・秦漢史・古代思想史・自然科学史・医学史・書法芸術史・歴史文献学・文字学・簡牘書籍制度などのさまざまな領域の研究において、極めて高い格別の学術的価値がある。北大漢簡の出現は、中華民族の貴重な文化遺産を増やすもので、必ずや国内外の学术界から注目されるであろう。

北京大学蔵西漢竹書の保存状況と保護措置について

この漢簡は、北京大学に収蔵された後、これまで我が国で出土した飽水状態の竹簡に対して行った保護の経験に基づいて、適切な保護措置が講じられた。その概要は

以下の通りである。

一、収蔵した時点での基本的な状況

漢簡が収蔵された時点で、竹簡は飽水状態にあり、出土後に既に洗浄されていた。附着していた泥土がほとんど洗い落とされた状態の竹簡は、九個のプラスチック容器の中に混在した状態で入れられており、ごく少量の編縄が残留していた。前に所有していた人物が、防腐のために竹簡をグリオキサール(葡注)溶液の中に浸していたが、その溶液の濃度は不明であった。

グリオキサールの作用からか、漢簡の竹の表面の色は薄く変化しており、竹本来の色に近かった。一枚一枚の竹簡の保存状態については、以下の三つの等級に区分することができた。第一は、竹簡本体が完整であるものである。これが竹簡全体のおよそ五十%を占めている。この等級に区分される竹簡は、本体は柔らかいものの、その端は鋭く、明らかな角の傷みや割けたところが無い。第二は、竹簡の残欠した部分が二十%以下のものである。これが全体の二十%を占める。この等級の竹簡には、一部のものに角の傷みがあり、中には端のところが割けているものがいくつか存在する。第三は、残欠が甚だしいもの(その中で簡長の不足しているものが八十%)である。この等級のものは全体の三十%を占めており、角の

傷んだもの、裂け目が生じたものが多く、多くの竹簡は簡長が四〜五cm不足している。

漢簡上の文字は基本的によく保存されている。極めて少数ではあるが、竹簡が傷んでいるために文字が欠損しているものもある。また、一部の赤色の顔料が浮いて流れているところがある。これは、顔料の層が比較的厚かったために、顔料に含まれる膠着成分が作用しなかったことと関係している可能性が考えられる。

二、洗浄と固定

整理作業をしやすくし、また後の保護作業に必要であることから、竹簡は簡牘博物館の専門家の手によって蒸留水で洗浄された。写真を撮影した後、竹簡はその保存状況に応じて、或るものはガラス片で片面をおさえ、或るものはガラス片で両面から挟み込み、その上から紐で縛って固定された。同時に整理番号札を付けた。

三、浸水保存

これまで我が国で出土した飽水状態の竹簡に対して行った保護の経験、特に長沙走馬樓竹簡の保護作業の経験に基づいて、脱水保護作業を行う前に、浸水保存処置を実施した。竹簡を蒸留水に浸すことには、前の所有者が竹簡に使用したグリオキサールを除去する効果があり、後に脱水保護を行う上で好都合である。

竹簡は光を避けて保存され、用いた器具類は消毒滅菌された。竹簡を浸水保存のために蒸留水に浸す際には、低濃度の第四級アンモニウム塩類の防腐剤を使用した。作業員は、定期的に保存液の検査と交換とを行った。

水に浸した竹簡を保存する収蔵室の環境は、気温が二十度に保たれ、またカーテンで遮光された。

四、安全管理

竹簡の収蔵室は二十四時間録画・監視されており、作業員・研究者が収蔵室に入室する際は、全員署名し、入退室の時刻を記録する。

また竹簡の保存液の汚染を防止するため、収蔵室入室者は、竹簡を調べる時に皆マスクを着用する。

五、次の保護措置—脱水保護

漢簡の釈読と編綴復原が終了した後は、国家の関連規定に基づき、保護脱水計画を制定し、脱水保護を進める。

補注

(1) サックラー Arthur Sackler 博物館。

(2) 「概述」には、『趙正（政）書』は、東方の六国の貴族の後裔が漢初に作ったものかも知れない、とある。

(3) 甲本・乙本・丙本の三本を合わせた分量のことを指して

いる。

(4) 「概述」には、北大簡本の『老子』の復原後の竹簡数は二二〇余枚とある。

(5) 「概述」には、『周訓（訓）』には、殷の湯王の太甲に対する訓戒や、周の文王の武王に対する訓戒などが含まれており、それらは従来知られていない内容である。また、「周の昭文公」は『戦国策』や『呂氏春秋』等に登場する戦国中期の東周の国君で、「恭太子」は西周の武公の太子であるとある。

(6) 「概述」には、『周訓（訓）』は、戦国時代の後半、貴族の子弟に対して政治教育を行う際に教材として用いられたものであるとある。

(7) 「概述」には、『妄稽』と、後述する『魂魄賦』との発見により、中国古代文学史が必ず書き換えられることになる。とある。

(8) ghyoxal